

〔義殘後覺三〕大蛇淵をさる事

内藏助<sup>々</sup>○<sup>佐</sup>どの、越中を領し給ふ、くにの繁昌するやうにとおもひ給ひて、北ろくだうのみちをつくり給ふに、こゝにかいだうのなかばに、兩はうは山にて、ふかきふちあり、谷底なれば、見わたすところ、三十けんばかりもあるらんと、思ふに、下は青ふちにてなん／＼とみえたり、これに大はしをかけて、往來の旅人をこゝろやすくとをさんとの給ふ所に、所の住人の申けるは、むかしより此淵には大じやのすみ候て、かならず一年には二人三人づゝ、とらぬとしは候はず、去によつて、まよこくのものきゝつたへに、このすちをとをり申さぬよしを申あぐる、内藏助き、給ひて、<sup>略</sup>○中さらばいそぎのけんとして、このふちのはたに、せいらうをあげて、石火矢をしかけ、人數をよせて、内藏助申されけるは、いかに淵の底なる大じや、ものをきけ、我このくにあるじとして、この海道をこゝろやすく、ゆき、のりよ、まんとをさんとおもふに、なんぢこのふちにありて、毎年人ゑをはむ事、きつくわいなりに、いそぎこのふちを、いづちへもとく／＼まかりのき候へ、かすはあしかるべし、先手なみのほどをなんぢにみせんとて、石火矢を天地もうごくばかりに、ふちの底へうたせ給へば、ふちはさかなみたつて、まんどろし、俄にきりをりてくらやみとなりけるが、たゞひとゝびにさほのしといふものに、たつみのかたへ十六七町とびて、山の尾さきへおちけるが、大地まんどろして、五十間四方なん／＼としたる淵となつて、則是にすみにける、これよりもはしをかけて、こゝろやすくゆき、をぞまたりける、まことにおびたゞしき大蛇といへど、道理にやをれたりけん、又石火矢におそれけん、ふしぎにぞ覺ける、

〔傍廂前篇〕孩子蛇を殺す

昔我殿のしろしめし、信濃國水内郡富竹村の農民、夫婦共に、田畑に耕作の爲に出でんとて、二歳なる男子をつぐらといへる、藁器にいれて、鴨居につり置きて、出で行き、午時にかへりて見れ